

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和6年度学校評価 中間評価

学校評価表作成について変更した点は朱書きしています

達成度（評価）

- A：十分達成できている
- B：おおむね達成できている
- C：やや不十分である
- D：不十分である

1 前年度 評価結果の概要	・学力向上では、校内研究を進め、全教科で授業改善に取り組み成果を上げることができた。 ・「心と体のアンケート」、「生と死を考える授業」、そして「カウンセラーによる授業」を実施することで、児童生徒は生命を尊重する心や家族や友達を大切にしようとする態度を培うことができた。
------------------	---

2 学校教育目標	「思いやりの心をもち、学ぶ意欲に満ちた児童生徒」の育成
----------	-----------------------------

3 本年度の重点目標	・9年間の学びの連続性を生かし、「東部学習スタイル」の充実を図り、主体的に学ぶ児童生徒を育成する。 ・開発的生徒指導や特別支援教育の推進を通して、心豊かで思いやりのある児童生徒を育成する。 ・コミュニティスクールとして、地域との連携を深め、地域人材や教材を活用し教育活動の充実を図る。
------------	--

重点取組内容・成果指標				中間評価		5 最終評価				主な担当者	
(1)共通評価項目				中間評価		最終評価		学校関係者評価			
重点取組				中間評価		最終評価		学校関係者評価			
評価項目	取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	達成度 (評価)	進捗状況と見直し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言		
●学力の向上	○児童生徒が主体的に学び、思考力・表現力を高める授業の実践 ○「東部学習スタイル」を、各教科で実践した」と答える教師が100%	○「東部学習スタイル」を、各教科で実践した」と答える教師が100%	・全職員で東部学習スタイル(めあての提示⇒考えを表現し交流する場「もくもくタイム」)「こだまタイム」の設定⇒学習をまとめ、振り返る)で授業づくりを行う。	B	・日頃の授業、東部教育事務所学校訪問及び小中一貫研究発表会等において、全職員で「東部学習スタイル」を意識した授業を行うことができた。	B	・校内研修で「東部学習スタイル」を共通理解し、研究授業や日頃の授業の中で実践することができた。また、研究教科の枠を超えて他教科の授業を参観することでも、特に前期課程の職員は、授業づくりや指導力を磨く機会をもつことができた。		・各学年で「東部学習スタイル」の実践100%は素晴らしい。 ・家庭における児童生徒の学習においては、個人や家庭により傾向な差がある。 ・タブレット端末を利用した家庭学習のあり方については、個人差がある。家庭での学習が課題？	・学力向上コーディネーター ・研究主任	
●心の教育	●児童生徒が、他者を思いやる心や自他の生命を尊重する心、感動する心など豊かな心をはぐくむ教育活動	○「友だちや家族の気持ちを考えて接している」児童生徒90%以上	・道徳科授業や人権集会、平和集会等を全職員で計画的に実施する。また、学校の取組を保護者に知らせ、家庭と一つになって児童生徒の心をはぐくむ。	B	・道徳科授業や人権集会、人権週間における各学年の授業、人権教育放送等を計画的に実施し、ホームページ等で児童生徒の様子を保護者・地域に発信することができた。また、縦割り班活動(苗植え、共遊など)を実施することで、学年の枠を超え、互いに温かい言葉で接する児童生徒が見られた。	B	・道徳科の授業と「生と死を考える授業」及び人権集会、平和集会等を関連付け、年間通して実践した。 ・命の尊さや家族・友達を大切にする取組を行っている教職員は、100%であった。 ・友だちや家族の気持ちを考えて接している児童生徒は93%で目標値をやや上回った。 ・挨拶や会話などで、友だちを「さん」付けで呼ぶなど、相手を思いやる言葉遣いができるようになることは継続課題である。		・学校全体の取り組みとしては、教職員が研修会に参加しているのは評価できる。しかし、全ての児童・生徒が理解し、実践できてはいない。 ・同和教育には私たちも気づきが起こり、難しいことです。歴史観点と現代的観点から考えていかれるとですが…。	・人権・同和教育担当者 ・道徳教育推進教師 ・各学年主任	
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○すべての教師が、アンケートや教育相談、日常のコミュニケーションなど機会をとらえて、問題の早期発見・対応に努める。	・開発的・予防的な生徒指導に取り組み、日頃から児童生徒の観察に重点を置く。同時に教育相談や学活ノートを活用する。	B	・日頃から児童生徒の観察及びコミュニケーション並びに毎月実施の生活アンケート等により、問題の早期発見に努め、発知時には組織で対応している。また、教育相談週間を実施し、個別面談を行うことで児童生徒の理解に努めている。 ・毎月の生徒指導協議会やリレーションシートを活用して、気になる児童生徒の共通理解を行うことができた。	B	・毎月生活アンケート及び児童生徒とのコミュニケーションを大切にすることで、問題の早期発見に努めた。また、事業が起きた時は組織で対応し、継続して見守りをする中で、重大事案はなく、解消することができた。 ・いじめの未然防止・早期対応に向けて取り組んでいると思う職員は、100%であった。		・児童・生徒・学校関係者で、いじめ防止等の対策や早期発見・早期対応を理解され、対応されている。いじめ防止対策委員会をスクールカウンセラーにも参加してもらい開催されている。 ・いじめには個人差があるかと思う。感じる事象は何か、考える必要がある。 ・これからは油断なく子どもたちを見守ってほしい。	・生徒指導主事 ・教育相談担当	
	●○児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒80%以上 ●「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒80%以上	・先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒80%以上 ・将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒80%以上	・授業だけでなく、教育活動全体で生徒指導の機能を生かした取り組みを実施する。 ・進路説明会や社会体験活動、総合的な学習の時間等を通して、児童生徒が夢や目標を持てるように内容の充実を図る。	B	・学校・学年行事(体育大会や委員会活動、文化発表会、児童生徒総会、職業体験等)において児童生徒は主体的に計画・実行することができた。その後、それぞれの頑張りをよさを認めあふことで、学校生活を意欲的に送ることができるようになった。 ・保護者にも相談会や連絡ノート等で児童生徒の学校生活での頑張りを伝えることにより、一人一人の自己肯定感を高めるようにしてきた。	B	・体育大会や委員会活動、文化発表会などの行事において、児童生徒が計画・実行する活動を選んだ。その後、児童生徒の頑張りをよさを認めあふ場を設けることで、達成感や成就感を味わわせるようにした。 ・「将来の夢や目標をもっている」とについて肯定的な回答をした児童生徒は83%で目標をやや上回った。		・子どもたちに将来の希望や夢をもたせることは大切である。本人の意欲を高めていくような授業等を進めてほしい。 ・体育大会で子どもたちの頑張りをよさを見ることができた。日頃の授業だけでなく、教育活動全体で生徒指導の機能を生かした取り組みを実現してほしい。 ・進路説明会や社会体験活動、総合的な学習の時間等を通して、児童生徒が夢や目標を持てるように内容の充実を図っていくことが大切である。	・生徒指導主事 ・進路指導主事 ・各学年主任
	○「生と死を考える授業」の取組	○授業や生活を通して、「命の尊さを知り、家族や友達を大切にしている」回答した児童生徒90%以上	○授業や生活を通して、「命の尊さを知り、家族や友達を大切にしている」回答した児童生徒90%以上	・「ホスピスをすすめる会」など関係機関との連携により、年間を通して「生と死を考える授業」を実施する。保護者に公開したり、ホームページ等で伝えたりすることで、家庭と一体となって命の大切さを感じることができるようになる。	B	・看護専門学校学生とのグループワークや「ホスピスをすすめる会」から講師を招き、「生と死を考える授業」を実施することができた。また、2学期には、8年生による緩和ケア病棟訪問を行い、交流を行うことができた。3学期には、報告会を行う。 ・9年生による前期課程への「生と死を考える授業」では、担任同士の打合せを密にし、授業のリハーサルまで計画的に実践することができた。	A	・「生と死を考える授業」を通して学んだことを報告する会(8年生による発表会)を実施することができた。 ・「命の尊さを知り、家族や友達を大切にしている」と回答した児童生徒は97%で目標を上回った。		・東部校の伝統の取り組み、これからもよろしく願います。 ・東部校ならではの命の授業は、児童生徒・保護者にも、深く考えられている良いことだと思ふ。 ・「生と死を考える授業」の取組は、東部校伝統の教育である。これからは生命の大切さを考える原点として取り組んでほしい。	・生と死を考える授業担当 ・各学年主任
●健康・体づくり	●望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成	●「健康に良い食事をしている」と回答した児童生徒80%以上	・「早寝・早起き・朝ごはん」を保護者の協力のもとに徹底する。 ・「保健だより」「給食だより」を活用して啓発を図る。 ・「My弁当の日」(昼食を家庭で作り、学校で食べる食育活動)を設け、食の大切さを実感させる。	A	・「保健だより」「食育だより」(給食センターとの連携)を発行し、保護者への啓発を図ることができた。 ・給食時間を中心に、学校栄養職員による食育に関する指導支援を各学年で行うことができた。 ・「健康に良い食事をしている」と回答した児童生徒は、約90%で目標を達成することができた。	A	・年間を通して、「保健だより」や「食育だより」を発行し、保護者・児童生徒への啓発を図ることができた。 ・「毎日、子どもは、朝食をとっている」と回答する保護者は、98%であった。定時までに登校する児童生徒はほとんどであるが、次年度は「早寝早起き朝ごはん」の定着を目指す。		・毎朝、食事ができている児童生徒が目撃値を上回っているのはいいことだが、1日の生活リズムがきちんできているのかどうかは分からない。 ・食育に関して、毎日きちんと三食摂れているならば安心だが、保護者が非常に忙しい家庭で食事が崩れているのが心配である。	・教務主任 ・児童生徒会担当 ・各学年主任	
	○安全に関する資質・能力の育成	○児童生徒の交通事故を0(ゼロ)にする。 ○交通安全を意識して行動していると回答した児童90%以上。	○児童生徒の交通事故を0(ゼロ)にする。 ○交通安全を意識して行動していると回答した児童90%以上。	・児童交通指導員を中心に、児童生徒自らが交通規範意識を高める取組を行う。 ・安全教育及び安全管理を計画的に実施し、児童生徒が自ら交通安全・生活安全を意識した行動ができるようにする。 ・災害時引き渡し訓練を実施し、危機発生時には、組織で対応できるように備えておく。	B	・東多町交指指導員による登下校時の見守り及び交通安全教室での安全指導、児童交通指導員による交通安全に関する呼びかけ(挨拶運動、全校放送等)を行った。また、定期的に職員による朝の交通指導及び学級活動での安全教育を実施した。これらの働きかけにより、児童生徒に交通安全・生活安全についての意識を高めることができた。	A	・定期的に職員による朝の交通指導を実施し、地域と連携した安全指導に取り組んだ。 ・毎月2回、地域で集団登校を実施し、通学路の危険箇所等を意識しながら取り組ませることで、児童生徒に交通安全についての意識を高めることができた。 ・事故に遭ったり、けがをきたりしないように日頃から気を付けていると回答した児童生徒は94%であった。今後も、児童交通指導員による啓発活動や職員による安全教育を計画的に取り組んでいく。		・児童交通指導員を中心に、児童生徒自らが交通規範意識を高める取組をしていることは評価する。 ・安全教育及び安全管理を計画的に実施し、児童生徒が自ら交通安全・生活安全を意識した行動ができるようにする。 ・災害時引き渡し訓練を実施し、危機発生時には、組織で対応できるように備えておく。 ・元気に登下校できているようだが、交通ルール、特に低学年の歩道の歩き方が気になる。	・保健主事 ・学校栄養職員 ・食育推進担当者(給食主任)
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 ・職員一人一人の時間外在校等時間が令和5年度より短くなる。	・毎日の出退勤時間の入力と定時退勤日の実行の徹底を図る。 ・年毎の各種会議、研修会の内容の精選及び時間配分、担当者の計画的な進捗により放課後の執務時間を保障する。	B	・企画委員会で学年主任、教務主任、事務室職員等と事前の共通理解を図ることで、職員会議は時間内に終わることができている。時間外在校時間の平均時間は、昨年度よりも改善されている。一方で、業務で時間外に残る職員も数名見られる。行事等の精選及び内容の見直し、業務改善に関する研修を行うとともに、業務等の平準化に向けた準備を進める。	B	・時間外勤務時間の平均は、20時間以下となり、一昨年度、昨年度より更に改善されている。放課後の会議や研修会、打合せ等をできるだけ精選し、学年事務の時間を保障してきた。 ・企画委員会で学年主任等と事前の共通理解を図ることで、職員会議は時間内に終わることができている。		・就業時間の遵守はもちろんであるけれども、精神的にもON・OFFの切り替えをしてほしい。 ・保護者対応等も職務に含まれているので厳しいと思う。 ・セキュリティ対策が必要(通信機器等)。 ・業務改善は皆が目玉にしていること。生徒・学校に対する思い、熱意もあり、計画通りにはいかないと思います。	・管理職	
	○ICT利活用による業務改善	○ICTの利活用により業務改善を図った」教師80%以上	○ICTの利活用により業務改善を図った」教師80%以上	・保存のデータを改善・活用することで、準備等に要する時間を短縮する。 ・各学年の教育活動及び校務分掌事務で作成した資料及びデータを次年度以降の業務に生かすことができるよう分かりやすく整理する。 ・iPadやタブレット端末を授業や家庭学習、評価活動、校務分掌事務等に生かすことで業務改善を図る。	B	・職員は、授業や学年行事等の資料作成時に保存のデータを改善・活用することで、計画や準備に余裕をもって取り組むことができた。今後は、事後の反省を基に担当者が資料を改善し、次年度以降の担当者にスムーズにつながるようなことができるようにする。 ・WBSや学習用端末を教材提示や学び合い、単元のまとめ等に活用することで、印刷物等に要する時間を削減し、その時間を児童と向き合う時間等に充てることができた。また、タブレット端末を学級閉鎖期間における連絡・課題提示やアンケート(集計)、職員への連絡事項等に生かすことができた。	B	・下期もWBSや児童の学習用端末を、教材提示や学び合い、単元のまとめ等に活用することで、印刷物等にかかる時間を削減した。高速プリンタなどの環境面も整備されている。 ・教材や行事に関するデータを活用することで、時間短縮を図ることができた。 ・学期別研修や臨時休業時など児童生徒への連絡事項や課題提示及び児童生徒からの返信など双方向のやり取りができた。 ・ICT利活用等で業務改善に取り組んでいると回答した職員は89%で、目標を上回った。		・下期もWBSや児童の学習用端末を、教材提示や学び合い、単元のまとめ等に活用することで、印刷物等にかかる時間を削減した。高速プリンタなどの環境面も整備されている。 ・教材や行事に関するデータを活用することで、時間短縮を図ることができた。 ・学期別研修や臨時休業時など児童生徒への連絡事項や課題提示及び児童生徒からの返信など双方向のやり取りができた。 ・ICT利活用等で業務改善に取り組んでいると回答した職員は85%で、目標を上回っている。	・管理職
(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目				中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者	
重点取組				中間評価		最終評価		学校関係者評価			
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	達成度 (評価)	進捗状況と見直し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言		
○義務教育学校の推進	○地域人材・教材の積極的な活用によるコミュニティ・スクールの推進	○「地域の方との体験活動やボランティア活動を楽しみ、有意義だった」と回答した児童生徒80%以上	・地域の各種団体との連携を深め、地域の人材・教材の活用を充実させる。 ・児童生徒会を中心としたボランティア活動を推進する。	B	・学校行事や授業等において、地域の人材活用を計画的に行うことができた。今後も担当者及び職員が、地域社会の窓口となり、関係機関と連携を強化していく。 ・学校運営協議会において、地域との連携は良好であるとの評価を受けている。	B	・学校応援団(地域人材・諸団体)のサポートにより、各教科等で体験学習を取り入れることができた。 ・地域の方との学習で、一緒に活動することや体験活動を楽しんでいる「学んだことをこれからの生活に生かしたい」と回答する児童生徒は87%で目標を上回った。		・小中の連携が上手にとれていて、運動会等の行事においても、異学年交流がプログラムに組み込まれていることは高く評価できる。 ・義務教育学校は不登校は少ないという文句があって、取り組んで聞いていました。しかし、最近、心配になってきています。そうではないだろうという言葉を耳にします。 ・小中一貫教育の利点が見られてきていると思います。 ・地域連携活動を積極的に行われようとする取り組みは高く評価できる。 ・地域活動は細かくやられていると思っています。それに応える地域作りも大事である。	・教務主任 ・児童生徒会担当 ・各学年主任	
○特別支援教育の充実	○特別支援教育の支援体制の充実	○「児童一人一人の個に応じた支援を行うことができた」と回答した教師80%以上	・長期休業中に、講師招聘研修会、特別支援教育コーディネーターによる研修会を実施する。 ・特別支援教育に関する外部研修に積極的に参加し、研修後は、他の職員に向けての報告等を行う。	B	・各学年教室に、わかば学級(特別支援学級)担任が支援に入ること、児童生徒一人一人に適切な支援を行い、円滑な学級経営を行うことができた。また、交流及び共同学習を推進し、壁し声を掛け合う児童生徒の姿が見られた。 ・春・夏・夏季休業中に校内研修(講師招聘研修会、個別的教育支援計画・個別の指導計画作成等)を取入れた。また、日頃から交流学級担任とわかば学級担任との打合せをもつようとした。これらの取組により、児童生徒理解と職員の指導力向上につなげることができた。	B	・各学年に特別支援学級担任が支援に入ること、児童生徒の実態を知り、適切な支援を行うことができた。 ・日頃から交流学級担任とわかば学級担任が児童生徒の支援や生活指導等で打合せをする姿が多く見られた。職員の指導力向上につなげることができた。 ・個に応じた支援を行っていると回答する職員は96%で目標を上回った。		・要支援児は年々増えている。保護者によって違いが見られ、受け入れられる専門(医)で対応される方、受け入れられない保護者、対応できない保護者等様々である。スクールカウンセラーと保護者との関係をしっかりと持ち、子どもを支援していきたい。 ・学校全体で対象の児童・生徒、保護者に支援を行うことは大切である。(委員は)特別支援教育に関する関係機関と連携し、子どもの実態に合った支援を家庭と共有して取り組んでいる。学校も同じように取り組んでいるので今後も続けていきたい。	・特別支援教育コーディネーター	

●…県共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育

5 総合評価・次年度への展望	・道徳科を中心とした学習活動(「生と死を考える授業」、人権教育、特別支援教育等)を計画的に実践することにより、互いに優しく声を掛け合う児童生徒の姿が見られるようになってきた。また、一人一人が落ち着いた態度で学校生活を送ることができた。 ・相手を思いやる心をはぐくむため、道徳科を中心とした学習活動(「生と死を考える授業」、人権教育等)を計画的に実践していく。 ・校内研究の推進を受けて、教材研究や準備、指導方法など授業づくりについて考えを磨き合う職員の姿が見られるようになった。次年度は、本校の課題である基礎的基本的な内容の確実な定着とともに思考力・応用力を要する課題に対応できるようにするため、少人数授業や習熟度別指導、スキルタイムの見直し、ICTを活用した授業等を計画・実践する。
----------------	--